

心理教育プログラム「キラキラプログラム」に関する研究 —COVID-19 感染症拡大下における小学校での取り組みから—

米田 薫^{*1}
齋藤 麻依^{*2}
和久田 耕平^{*3}

【要旨】

新型コロナウイルス感染症拡大時には、学校教育の場でも感染拡大を防ぐために様々な制限が課せられ、それに伴って、多くの活動が中止になったり制約を受けた。社会性と情動性を育てることを目的として、構成的グループエンカウンターとソーシャルスキル教育を合わせた児童・生徒対象の心理教育プログラムであるキラキラプログラムも、その例外では無かった。本研究は、当時の制限された状況下に応じて、実施方法を工夫したキラキラプログラムの実践について検討し、さらに、コロナ禍の学校で過ごす児童が考えるよいクラスとは何かを明確にし、今後の「新しい日常」下の学級づくりに資することを目的とした2つの実践について報告する。

実践1の結果から、シェアリングの場面で代表的な気持ちとその理由を示し、該当するところで挙手する方策は、通常時においても児童の参加しやすさや抵抗感の低減に寄与するものであることが示された。実践2の結果から児童の考えるよいクラスは、クラスの間関係とクラスの環境の2つが要因として挙げられ、学級集団づくりの重要性が示唆された。

キーワード：コロナ禍での学級づくり、キラキラプログラム、小学校

I 問題と目的

1. 問題の背景

米田・谷口(2022)が指摘するように、2019年12月に発生したCOVID-19(新型コロナウイルス感染症、以下、「新型コロナ」とする)は、世界に甚大な被害を及ぼし、子どもや学校も大きな影響を与えた。当時の文部科学省は、2020年6月5日付けで「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」を通知、これは2021年2月19日付けで改訂されたが、新型コロナ拡大下でも持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障していくため、学校における感染およびその拡大のリスクを可能な限り低減した上で、学校運営を継続していく必要があることを示した。このガイドラインに基づいて出された「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル『学校の新しい生活様式』」では、「密閉」「密

集」の回避、「密接」の場面への対応、といった集団感染のリスクへの対応や具体的な活動場面ごとの感染症予防対策と共に、「児童生徒等の心身の状況把握、心のケア」や「感染者等に対する偏見や差別」の防止等への留意を求めた。そうした状況下で、同年6月から学校が再開されたが、いわゆる「3密」を避けるために、子ども同士の距離を取って過度の接触を禁じたり、教室内でも大きな声を出せなかったり、常にマスクをつけて活動する等の様々な制限が続いた。また、例年なら学級びらきからはじまる特別活動の校外学習や修学旅行等の宿泊行事、運動会や球技大会等の体育的行事、文化祭や学芸発表会等の文化的行事は中止や規模縮小に追い込まれ、子どもたちの「思い出」となるものが次々と削られていった。一方、教員も学力保障のためのICTを活用した遠隔授業等の対応にも追われ、子どもも教員も「新しい日常」に適応することが求められる日々が続いた。

*1 大阪成蹊大学 教育学部

*2 大東市立諸福小学校

*3 交野市立星田小学校

2020年4月に国連・子どもの権利委員会が発表した「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関する声明」の骨子の中でも「1. 今回のパンデミックが子どもの権利に及ぼす健康面、社会面、情緒面、経済面およびレクリエーション面の影響を考慮すること」、「2. 子どもたちが休息、余暇、レクリエーションおよび文化的・芸術的活動に対する権利を享受できるようにするための、オルタナティブかつ創造的な解決策を模索すること」、「3. オンライン学習が、すでに存在する不平等を悪化させ、または生徒・教員間の相互交流に置き換わることがないようにすること」、「7. パンデミックが引き起こす例外的状況によって脆弱性がいっそう高まる子どもたちを保護すること」等をはじめとして、本邦においても大きな課題であると米田・谷口(2022)は述べた。特に7.に関しては、人間関係を築くことが苦手な子どもをはじめとして、障害のある子どもや家庭状況が芳しくない子ども、マイノリティの立場にある子どもたちには手厚い支援が求められるが、それが十分であったとは言いがたいと言わざるを得ない。それは、小中学校における不登校児童生徒数が2019年度181,272人、2020年度は196,127人と過去最大を更新した要因の一つと言えるかもしれない。

2. 新型コロナ下での人間関係づくりの取り組み

こうした状況の中で、子どもの人間関係の形成や維持に資する取り組みは、特に、単発ではなく複数回以上のプログラムを持った心理教育の取り組みの多くは「後回し」に追いやられた状況にあったことは否めない。ただ、すべての取り組みが中止されたのではなく、こうした状況だからこそ実践されたものも散見される。

例えば、澤(2021)はストレスを抱えた子どもが多い状況を踏まえて、ストレスマネジメント教育を小学2年生の2学級で実施した。内容は「心身のストレス反応およびストレスコーピングを例示すると共に、リラクゼーション法(筋弛緩法、呼吸法)の体験」で、1回の実践で「いらいら」が減少したことを報告している。岸田(2021)は中学1年生1クラスを対象に1回数分程度の対人関係ゲームを2～3人グループで進級前の3ヶ月間に繰り返し実施し、Q-Uアンケートの学級満足度尺度が承認得点と被侵害得点のいずれもが有意に上昇していることを示している。

また、藤田(2021)は構成的グループエンカウンターなどができない状況下の特別支援学級の児童において、共通のテーマで発表する場や級友との意見交流の場を設けて実践した結果、個人の知的好奇心

の伸長、親和的な学級の雰囲気、仲間意識の成長が見られたことを報告している。米田・谷口(2022)は、中学校特別支援学級の生徒24名を対象に、感染症対策を実施しながら心理教育「キラキラプログラム」(以下、「キラプロ」とする)を自立活動の時間に実施し、自他理解を深めながら自己表現できる幅がひろがり、自分の気持ちを大事にしつつ安心して相互交流を図る集団として成長したことを報告している。

これらの実践研究は、新型コロナ下という緊急事態の基で取り組まれたものであるが、その中に含まれる方法や内容は、それ以降の「新しい日常」下でも、人間関係を築くことが苦手な子ども達のために引き続き継続すべきもの、さらに検討して展開すべきものが含まれていると考えられる。

3. 本研究の目的

和久田・米田(2019)によれば、キラプロは社会性と情緒性を育成することを目的として策定された児童・生徒対象のSEL(Social and Emotional Learning)で、感情交流に焦点を当てた人間関係づくりである構成的グループエンカウンター(以下、SGE)、通称「朝キラ」を年間通じて週1回、短学活等の時間に10分程度実施し、安心して自己開示できる集団を醸成し、並行してソーシャルスキルの階層性や順序性を考慮したソーシャルスキル教育(以下、SSE)を年間10回、特別活動や道徳、総合的な学習の時間を用いて実施する心理教育プログラムである。これまでに小学校3年生対象の齋藤・米田(2017)、中学校特別支援学級対象の米田・谷口(2019)(2021)をはじめ、小学校1年生、2年生、3年生、5年生、6年生、中学校、特別支援学級、適応指導教室で実践されている。

本研究は、新型コロナ拡大下で様々な制限のある状況下において、感染症対策にも留意し、心理教育の実践方法にも平常時には用いなかった新たな工夫を施して、SGEとSSEを組み合わせたキラプロに基づく人間関係づくりを進めた実践について振り返り、コロナ禍での学級づくりにおける工夫を、以前までの取り組みと比較することで、「新しい日常」下の学級づくりに資することを目的とした。

また、人間関係づくりの重要性は自明だが、それに資する心理教育プログラムがめざす集団や、いわゆる「よいクラス」については、米田・柳井(2021)が指摘する通り、ステークホルダーの一翼を担う児童生徒の思いを検討したものは少ない。さらに、コロナ禍という非常時において、子ども達はどうのようなクラスを「よいクラス」と考えているのかを知る

ことは今後の心理教育の発展に欠かせないものであると考えた。

具体的には、感染症対策を行った上での短時間で行うキラプロの新たな工夫を平時のものと比較し、効果の検討を行った実践を実践1、子どもたちと考えた「新しい日常」下での「よいクラス」についての調査及び分析を実践2として、新型コロナの影響下で制限された中で人間関係づくりについて得られた知見を、今後、どう生かすかを検討した。

Ⅱ 方法

1. 対象

実践1と実践2について、関西圏公立小学校の1年生(36名)と6年生(36名)を対象に行った。

1年生のクラスの実践前の様子は、落ち着いた様子であるが、おとなしい子どもが多い印象があった。初めての小学校生活ということと新型コロナ禍の中で、分散登校を経験し、学校というところがどのようなところか分からず、クラスの全員の友だちも把握するのも時間がかかり、不安が強かったのではないかと考えられた。最初は、幼稚園などが同じ子ども同士で話をしているようであった。授業中もとても静かであった。このクラスで、自分の気持ちを言葉にすることが難しかったAは、表情も乏しく、授業中も友だちが教えに行っても反応が返ってくることは少ない状況であった。

6年生のクラスの実践前の様子は、全体的に明るく元気で人懐っこい印象はあるものの、学年が2クラスであるために、クラス替えをしても前年度のクラスの人間関係に基づいてグループが固定化されている様子が見受けられた。発言力のある児童たちのみで物事を進めたり、からかいやふざけて相手を傷つける言動も見られた。学習面・生活面で配慮の必要な児童が全体の6分の1ほどおり、前年度から不登校傾向であった児童や人間関係で大きなトラブルが今までにあった。その中でも、不登校傾向にあったBは、前年度は教室に入ることがほとんどできず、別室登校を行っていた。宿泊学習や運動会などの学校行事には参加しなかったが、3学期の最後の時期に少し教室に顔を出すことができるようになっていた。休校期間中、家庭訪問をして事前にBと保護者に話を聞くことができた。そこで改めて前年度の話やB本人の今の気持ちとこれからの生活についての願いを聞きながら、登校が始まった際の打ち合わせを行った。分散登校を経て始まった新学期は、遅刻や欠席がありながらも最初から教室に入ってスタートすることができた。

2. 実施時期と内容

実践1は、2020年6月～2021年3月までの間で行った。実践2は、1年生は2021年3月に、6年生は2020年10月に行った。

2.1 実践1の内容と手続き

新型コロナ拡大下ではあったが、クラスの子どもの成長を促す温かい人間関係を育てるために、キラプロを感染症対策に配慮しつつ実践した。

コロナ禍で実施するプログラムの構成や実践に際して通常プログラムより配慮し、修正したことは2点ある。

プログラムの構成は、SGEの感情交流による自己理解を促しつつも、感染症対策として近い距離での会話や接触を極力減らしたエクササイズを検討し、修正を加えたことである。たとえば、「あなたを知る〇×クイズ」は、実施教員がみんなにお互いを知る簡単な質問を行い、それについて〇か×でペアの答えを予想して当て合うことを通して自己理解を深めるエクササイズである。今回の新型コロナ禍のため、このようなエクササイズの作成や変更に当たっては、SGEに通じた大学教授1名とSGE体験を積んだ教員数名で行った。そのメンバーで、新型コロナ禍の制限の中でも抵抗なくできるSGEのエクササイズを作成し、ミーティングにて模擬授業を行い、内容を検討した。実践者は、研修会にも参加し、新しいエクササイズを体験・練習した上で実践に当たった。全体の実施内容を(表1)と(表2)に示す。

表1 SGE 実施内容

実施時期	SGE
1学期 2学期	みんなで拍手
	あなたを知る〇×クイズ
	無言でゆびさしクイズ リズム回し
2学期	違うのはそれだね！ グループ紙上討論会
3学期	言葉の花束

表2 SSE 実施内容

実施時期	SSE
1学期	表情の読み取り
	同じ気持ちと違う気持ち
	あったか言葉とトゲトゲ言葉
2学期	上手な頼み方
	上手な断り方

実践に際して、通常よりも配慮した工夫として、直接の会話を控えるため、エクササイズやシェアリングの目的をわかりやすい言葉で短く表現するように指導プランを再考した。その際に、教員の発言も極力減らすためにスライドも積極的に活用し、視覚的に理解できるよう心掛けた説明を行った。

また、シェアリングは気持ちとその理由を直接語り合うのが通常であるが、会話を控えるために、これまでの実践で子どもたちからよく語られた気持ちと理由をスライドにして選択肢で示し、その中から子どもたちが選んで挙手するシェアリングを実施した。スライドの例として、今の気持ちを（図1）、（図2）、その理由を（図3）、（図4）に示す。

いまのきもちを、
①たのしかった・うれしかった
②はらがたった・イライラした
③かなしかった・ガッカリした
④ホッとした・なごんだ

図1. 1年生のシェアリング時のスライド例（気持ち）

今の気持ちは、
①楽しかった・うれしかった
②腹が立った・イライラした
③悲しかった・ガッカリした
④ホッとした・なごんだ
⑤その他

図2. 6年生でのシェアリング時のスライド例（気持ち）

りゆう
A. もっといろいろききたい
B. おもっていたこととちがった
C. ほかにきいてほしいことがあった
D. くだらない！
E. すこし、しれたきもちになれた

図3. 1年生のシェアリング時のスライド例（理由）

理由
A. 色々知ることができた
B. 思っていたのと違う印象だった
C. もっと他の質問もしたくなった。
D. つまらない！
E. 自由に話したい。
F. その他

図4. 6年生のシェアリング時のスライド例（理由）

2.2 実践2の内容

実践1を始めたとき、子どもたちは様々な制限がかり、今までの日常と一変した生活を送っていた。

しかし、子どもたちは限られた枠の中でも友だちとの関わりを楽しみ、ともに学ぶ姿を見せていた。その様子から、クラブプロがめざしてきた今までの学級づくりによる“よいクラス”と、コロナ禍での“よいクラス”には共通する部分があり、それは限定された状況でもよりよい学級づくりが行える可能性を示すものであった。それを明らかにすることは今後の学級づくりに資すると考え、クラブプロを含む心理教育全体の発展に寄与すると考えた。また、子どもたち自身が求めるよいクラスとは何かについて検討する必要があると考え、自由記述によるアンケートを行い、分析を行った。

2.3 倫理的配慮

本研究は、大阪成蹊大学倫理審査委員会「大2020-2」（2020年5月18日承認）にて調査研究の承認を受け、その有効期限内に実施した。

2.4 アセスメント

実践1では、新型コロナ対応として、できる限りプリント類の配布・回収を極力減らすために、児童が記述する振り返りシートやアンケートは実施せず、実施教員の観察のみで評価を行った。

実践2では、よいクラスについて児童に記述式のアンケートを行った。1年生では、よいクラスと嫌なクラスについて尋ね、それぞれについて児童の回答を整理し、分析した。6年生では、最高のクラスと最悪のクラスについて尋ねた。出し合った回答を児童が担当教員と確認しながらグループ分けして分析した。

Ⅲ 結果と考察

1. 実践1の結果と考察

1.1 1年生の結果

コロナ禍での実践のため、制限も多く1年生の子どもたちの相互理解が進むまでに非常に時間がかかった。子どもたち同士は、たくさんの友だちとつながりたいという気持ちを持っていたが、授業の中でもペアやグループでの交流はできる限り無くして、一斉授業の形で行うことになっていた。そのために、1年間を通して、子どもたち同士の交流を行うことはほとんどなかった。1学期は、やっと学校生活にも慣れてきたところで、夏休みに入った。2学期も行事はほとんどなく、外に出て遊ぶことも、給食をみんなでしゃべりながら楽しく食べる光景もほとんど見られなかった。3学期も同じような状況であった。そのような状況の中でもキラプロを行い、交流の時間を意識して取ることで、コミュニケーションの取り方を学んでいるようであった。生活全体で交流できる場が減っているためか、友だちと交流ができるキラプロを実施しているときの子どもたちの様子は、非常に楽しそうであった。

中でも、シェアリングでは、対面で話せない代わりに、気持ちの項目などを提示し、挙手して自分の気持ちを表現することで、自分の気持ちを話しやすくなっていったように感じた。項目をきっかけにして、話が少しずつ広がっていった。自分の気持ちを言葉にすることができなかったAは、実践を通して、自分のことを話せるようになり、2学期後半には、自分から積極的に担任や友だちに話しかける場面が増えていった。それとともに、笑顔も増え、給食は黙食だったが、表情やジェスチャーで友だちや教員とコミュニケーションが取れるようになっていった。

そして、SSEについても実践を行うことで、子どもたち同士の日頃の声掛けが攻撃的な言葉ではなく、相手を思いやる声掛けに変化していった。

1.2 6年生の結果

学級全体としては、実施前と比べると児童のコミュニケーションの量と質に変化があった。新学期当初と比べて、固定化されたグループが大きく変化することはなかったが、グループを超えて交流する姿が、授業や行事の取り組みの際に見られ、交わされるコミュニケーションの量が増えたことが見てとれた。また、前年度から受け持っていた専科の担当教員からはグループでの話し合いや学習面での成長を感じるとのことから、コミュニケーションの質に

もよい変化があったと考える。

休校や分散登校の期間が終わり、制限がある中ではあるが学級活動を再開できた子どもたちは、短い時間でもエクササイズを通して友だちと交流する時間を楽しんでいたように見えた。新学期始まって最初のシェアリングでは、楽しかった気持ちとホッとした気持ちに多くの手が挙がった。理由は、久しぶりに友だちと顔を合わせ、やりとりすることができたからだ。

一方で、マスクがあって相手の顔がよくわからないこと、マスクが邪魔だとの理由でイライラする気持ちに手を挙げた児童もいた。自他理解と自他受容が進む中で、感情交流が深まる際、イライラした気持ちや上手くいかない不全感のようなものが出されることもあった。特に修学旅行後から3学期にかけてそれは顕著に表れていた。

少人数で行われた分散登校をきっかけに教室での活動に入りやすくなっていた不登校傾向のあるBは、大人数の前で話すのが苦手だったが、SGEにも最初から参加できていたので感想を聞いてみると「喋らなくていいから参加しやすい」とのことだった。徐々にクラスの雰囲気も落ち着き出し、1学期中頃からペアやグループの児童とも少しずつ話せるようになってきた。Bは理科が好きで休み時間はよく理科の専科の教員と話をしていた。専科の教員は、Bが変わっていく様子を見て、笑顔が増えて楽しそうにしていることが多くなったと教えてくれた。2学期は、様々な配慮をした上で運動会や修学旅行などの行事を実施することができた。Bもその全てに参加することができた。特に修学旅行では、グループ活動のリーダーもやってみたいと言い、班編成からリーダーとして活動することができた。準備を進める中で時折、疲れた様子も見せていたが友だちと助け合って頑張っている様子が見られた。修学旅行当日は、無事リーダーの役目を果たすことができた。この体験が自信にもつながったようで、3学期は卒業式に向けての実行委員として立候補し、活動することもできた。

そしてSSEの実践を行うことで、今までのコミュニケーションを振り返り、よりよいコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。ただし、1年生での取り組みと同様、本来のSSEは、児童が互いに交流して考えを広げたり、深めるプロセスが重要であるが、時間の制約があり、一部のスキルは情報の提示・共有にとどめざるを得なかった。

1.3 実践1の考察

1.3.1 1年生の考察

子どもたちの様子を見てみると、日頃授業でも行っている、ペアやグループでの交流はコミュニケーションスキルを高めるために必要不可欠だと感じた。コロナ禍によって、マスク越しなので、例年以上に表情の読み取りも非常に難しくなり、コミュニケーションの機会も減っているの、ソーシャルスキル教育も必要だと感じた。小さなトラブルも実際に学校生活で経験して学んでいくことであるが、コロナ禍では、学ぶ機会が極端に少ないことから、学ぶ時間を作ることは意味があると考え。実際に子どもたちが授業の中で練習することで、日常でもスキルを使っている様子が見られた。シェアリングについても、感情の交流をすることで、友だちとの関わりも増えていき、つながりも深まっていったように感じた。コミュニケーションの機会が減った状態で学年が上がっていくと、トラブルも増え、人間関係も複雑になっていくと予想されるので、SGEやSSEに取り組むことは子どもたちにとって有用だと感じた。特に自分から話をするきっかけが作れない児童にとっては、選択肢を用意するシェアリングの方法は非常に有効であったと感じた。自分の気持ちを言葉にすることができなかったAは、選択肢を用意することで、だんだんとコミュニケーションが取れるようになってきた。SGEを丁寧に行うことで、クラスが安心して自分の気持ちを話せる場になっていったことや自分で気持ちを伝えることを何度も繰り返すことでだんだんとできるようになってきたからだと考える。これは、SGEのシェアリングを通常よりも配慮して行ったことも要因の1つであると考え。

今回の実践では、キラプロの内容をすべて行うことはできなかった。コロナ禍によって、学習時間の確保が難しくなったことや接触回数や時間を限りなく少なくすることを余儀なくされたことが要因である。しかし、これから生活していく上で、人とコミュニケーションを取らずに生きていくことは不可能である。大人でさえも人と会ったり話したりすることができないことでストレスが溜まってしまっている状況で、子どもたちはそれ以上に今までより学習する時間も少なくなり、学習内容についても制限され不安になっている子どもたちが大勢いる。今後、どのようにうまくコミュニケーションを取っていくかについては、教員は今まで以上に子どもたちの様子に配慮して取り組みを計画・実施する必要があると考える。

1.3.2 6年生の考察

6年生の児童については、生活面や学習面での課題が多いとの引き継ぎを受けていた。年度当初は分散登校による少人数での授業を行ったが、それは一部分では、功を奏したようであった。一斉授業で、ペアやグループの交流は制限されていたが、学習面でのサポートは受けやすい状況であったからだ。SGEでは短時間で接触を減らすことを念頭に置いてエクササイズを展開することで、ねらいをより明確にして実践でき、子どもたちのシェアリングが目的に沿ったものになりやすくなったと考える。会話や接触することに制限があるものの、友だちと交流できることに喜びを感じている様子が見られた。これは休校期間中、保護者も子どもたちも互いを気遣い、友だちと会えなかったという理由から、友だちと交流できなかったと言う児童は少なくなかったことも要因に1つと考えられる。このことから、再開された学校で子どもたちが自他理解を深め、自他受容を促進する活動は有意義であったと考える。特に、二学期の修学旅行では、Bがグループ活動のリーダーに立候補したエピソードがある。これは、それまでの集団づくりにおいて、自他理解と自他受容が促進されて起こったと推察する。クラスの仲間は、Bについて理解を深めていたし、Bも仲間から理解してもらっている感覚を持っていたようである。

このことから接触を少なくしたエクササイズに取り組み続け、丁寧なシェアリングを心掛けることで、制限された中でも自他理解と自他受容を促進し、お互いのことを知る機会を作ることができたと考えられる。この経験は、授業でも互いの意見を交流しやすくなったり、2学期の運動会や修学旅行、校内の文化的な行事で協力して行動する場面でも役立った。

一方、自他理解と自他受容が進む中で、感情交流が深まる際、イライラした気持ちや上手くいかない不全感のようなものが出されることもあった。特に修学旅行後から3学期にかけてそれは顕著に表れていた。これらは、コロナ前の日常でも起こりえることであることは言うまでもないが、コロナ禍での様々な制限による影響も無視することはできない。そのような中で児童自身が抱えている個人的な葛藤、学習面や中学進学への不安などあり、その思いがイライラや不全感のような形で表現されたと推察する。そのように日々の生活の中で溜め込んだネガティブなものが、シェアリングで表現された際には、教員がその発言を受け止めてフィードバックしたり、クラス全体で共有したり、発言に対する他のメンバーの意見を求めたりした。その際に大切にした

ことは、受け入れることはできなくても、「そういう考えや感じ方もあるのだ。」と受け止め合おうということだった。そうすることで、互いの違いを認め合える集団に育ってほしいと願っていた。子どもたちは子どもたちの集団の中でその友だちのやりきれないイライラなどのネガティブな気持ちにできるかぎり向かい合っていた。それは3学期に、時には受け止め、時にはぶつかり合い、話し合う姿が見られたことから明らかとなった。

接触や会話を控えざるを得ない状況で、十分な体験ができなかったこともあった。エクササイズでいえば、自己主張や信頼体験のエクササイズが十分に実施できなかった。今後は、会話や接触を制限された中でも行える自己主張や信頼体験のエクササイズの検討も必要である。

1.4 実践1の結果と考察のまとめ

平時のキラプロではSGEとSSEを展開する際に児童と教員、子ども同士が対面して直接会話することを重視してプログラムを展開してきた。具体的には、SGEのインストラクションでの教員の自己開示や、エクササイズでの子ども同士の交流、子ども達の発言をつないでシェアリングする際や、SSEの実施場面でのマスターモデルを抽出する場面や練習、振り返り場面が挙げられる。

しかし、コロナ禍の非常時にはその直接対面しての会話に制限がかかった。そこで工夫したのは、SGEのインストラクションで説明を減らしたり、シェアリングの気持ちとその理由を2段階構成で尋ねたりすることを、ICTを活用してすべてスライドで行い、教員の発言を最小限に抑えた。児童同士の交流は、プリントなど紙面の活用とノンバーバルなコミュニケーション方法をメインにすることで発言を最小限に抑えたことである。これらはSSEにおいても同様に行った。

これらの工夫による効果は、コロナ禍においても子ども達が認知的・感情的な交流を行うことができたことで、互いのことを理解し合うことができ、安心を感じることができた児童が増え、その結果としてクラスとしての凝集性が見られたことである。この点に関しては、平時のプログラムで得られた効果と似たような効果が得られたと考える。また、新たに、特にSGEのシェアリングにおいて、スライドで選択肢を示し、感情とその理由を尋ねることが発言することが苦手な子ども達の参加を促す効果があったことが実感された。

逆に、会話の少なさから不自由さを感じる子どももあり、特に書くことを通して自己表現することが

苦手な子どもはストレスを感じていたようであり、今後の課題と言える。

2. 実践2の結果と考察

2.1 1年生の結果

次に、子どもたちに『こんなクラスがいいな。こんなクラスは嫌だな。』をテーマに記述式のアンケートを行った。結果を表3に示す。

表3 1年生の自由記述の結果

よいクラスの人間関係	よいクラスの環境
けんかがない。 友だちと仲良く遊べる。 友だちが困っていたら助けてくれる。 遊ぶのを誘ってくれる。 みんなが笑顔。 楽しいことがいっぱいある。 優しい人がいっぱいいる。 友だちがいっぱいできる。 いじめる人がいない。 いじわるする人がいない。 嫌なことを言わない。 ものを取られない。 授業の邪魔をしない。 授業中、静かにしている。 殴られたりしない。	先生がいなくても静かに待てる。 準備が早い。 楽しいことがいっぱいできる。 ちゃんとしたクラス。 ゴミが全然落ちていない。 みんな真面目。 トイレのスリッパがそろっている。 楽しいことがいっぱいある。 授業中、静かにしている。 みんなが学校に来ている。

2.2 6年生の結果

6年生では、キラプロIを実施後、「最高のクラスと最悪のクラス」をテーマに記述式のアンケートを行った。結果を表4に示す。

表4 6年生の自由記述の結果

学級の雰囲気に関すること	先生に関すること	環境に関すること
安心感がある。 いじめがない。 協力的である。 人の話を聞く。 自由がある。 楽しい雰囲気がある。 オタクでも引かれない。 差別がない。 会話がある。 相手の気持ちを考えることができる。	頭ごなしに怒らない。 明るい。 優しい。 話を聞いてくれる。	字がきれい。 エアコンが効いている。 清潔感がある。 整理整頓ができていて。 掃除をしっかりとっている。

2.3 実践2の考察

2.3.1 1年生の考察

アンケートを分類すると、＜よいクラスの人間関係＞と＜よいクラスの環境＞の2つに分類することができた。＜よいクラスの人間関係＞では、友だちと仲良くすることを中心に、相手に嫌なことをしない、されないということが示された。このことから1年生ではお互いの関係性に注目してよいクラスを想定していると推察する。＜よいクラスの環境＞では、静かにしていることや、ゴミがないこと、楽しいことができる、楽しいことがあるということが示された。このことから、環境が整っていることがよいことであるという価値観が表れていると推察できる。

1年生の児童のよいクラスについての思いがすべて表されているとは、今回のアンケートだけでは断言できない。思いを文字に表現することが苦手な児

童がいることや、担任教員が1年かけて子どもたちと過ごす中で伝えてきた思いがそのまま素直に表れていることも考えられるからである。しかし、アンケートを通して、コロナ禍の中だからこそ、子どもたちとよりよい学級やよりよい学校にしていくには、どうすればいいかをじっくり考える良い機会にも恵まれた。実践者としては子どもたちの実践の様子から、コロナ禍ではあったので、どうしても例年通りに行かないことがあり、制限なくできればよりよい人間関係づくりを行えるのという気持ちも多くあった。しかし、実践してみると、日頃当たり前のようにやっていた実践方法を試行錯誤して工夫しながら行うとうまくいくことも多かった。緊急事態宣言が発出されたり解除されたりする中で、学校内でのルールも日々変わっていった。大きな声では、批判的なことや不快な気持ちを言う子どもたちは見られなかった。しかし、休み時間など子どもたちと話しているとやはり、「自由にみんなと遊びたい。」や「みんなともっと話したい。」と口々に言っていた。頭では、理解しているが、実際にかんがりの我慢をしていたのだと想像できる。その中で子どもたちと一緒に今だからできることや、今を楽しむことに想像を膨らますことができた。

また、アンケートを取ることで、担任の思いは伝わっていたことに気付くことができた。そして、子どもたちの中にも、どのようなクラスにしていきたいかということが具体的に出てきた。そのため、どのようにクラス作りをしていくことが子どもたちの満足度につながっていくのかを考える良いきっかけとなった。コロナ禍でなくても、学級目標などを決める時に子どもたちの意見を聞きながらまとめていくことが多いと思うが、子どもたちの具体的な思いをひとつずつ丁寧に拾っていくことが大事だと、改めて感じることができた。そして、子どもたちの願いは、コロナ禍だからこそ、以前まで普通にできていた友だちとコミュニケーションを取ることができる時間が、かけがえのない時間なのだということが子どもたちからも多く聞けた。今後も今回のアンケートにも出てきたように、子どもたちが、笑顔で、みんなで助け合える学級づくりを実践したい。

2.3.2 6年生の考察

アンケートでは、児童が自分たちで内容を分類し、それを担任の教員と確認しながらまとめることができた。分類は、＜学級の雰囲気に関すること＞、＜先生に関すること＞、＜環境に関すること＞の3つである。

学級の雰囲気に関することでは、安心感や自由、

楽しい雰囲気、オタクでも引かれない、差別がないなどが示された。安心感や自由、楽しい雰囲気が必要であり、そのために、いじめがないことや協力的であることが挙げられたと推察される。

先生に関することでは、頭ごなしに怒らない、明るい、優しい、話を聞いてくれるが挙げられた。これは、担任教員との良好な人間関係をよいクラスの構成要因として想定したものと児童にとっての理想の教員像が混ざり合って表現されていると推察する。今後の研究では教員と児童の人間関係と、児童にとっての教員像が分けて抽出されるよう工夫する必要がある。

環境に関することでは、「エアコンが効いている。清潔感がある。整理整頓ができています。掃除をしっかりしている。」などから過ごしやすい環境を望んでいると考えられる。

児童の声を集めた今回のアンケートから、児童が考えるよいクラスについての方向性を知ることができたと考えられる。今後の研究においては、よいクラスの要因についてクラスの主体である児童生徒の視点から検討を深めるとともに、データの客観性を高めたい。

IV. まとめと今後の課題

最後に、本研究のコロナ禍での実践の効果と、新しい日常下の子どもたちが考える良いクラスとの関連を論じる。

実践1は、プログラム実施時に極力会話を控えるため、エクササイズの目的をわかりやすい言葉で短く表現し、シェアリングではエクササイズを体験して感じた気持ちやその理由を選択肢で示した。これは、1年生と6年生での実践から新型コロナによる制限下において子どもたちの感情交流の促進に役立つことが確認できた。また、クラスの活動に参加しにくいことが予想される児童も、参加しやすく感じたことも確認できた。本来、SGEを実践する際にシェアリングを選択肢で聞くことは、どうしても気持ちの出にくい児童がいる時や、十分に時間が割けない状況などにとどまり、それも口頭で行うことが一般的である。本実践において、コロナ禍で会話を限りなく制限せざるを得ない状況に配慮した工夫は、新型コロナ前であったとしても児童の参加しやすさ、抵抗感の低減に寄与するものであると考えられる。

また、SGEを実践する際、実践者がSGE体験を積み、習熟度を深めておく必要があることはもちろんであるが、実践者がSGE初学者であったり、会

話が苦手な児童が複数名いる際には、シェアリングの選択肢を提示することは集団づくりの初期のシェアリングのひとつの方法として役立つと思われる。

実践2では、1年生と6年生の児童が考えるよいクラスについて検討を行った。抽出されたものを分類すると、大きくはクラスの人間関係とクラスの環境の2つがよいクラスの要因として挙げられた。このことから、1年生でも6年生でも、よいクラスの要因は共通している可能性が示唆された。制限された中だからこそ、児童がより具体的に「こんなクラスがいい！」というよいクラスについての本質的なイメージを膨らますことができたとも考えられる。

本研究の課題としては、様々な制約の中で、実践1と実践2において客観的なエビデンスの収集や、十分な量のデータの収集と客観的な分析が充分にはできなかったことが挙げられる。今後は、新しい日常の下で多くの子どもたちがプログラムに心地よく参加でき、成長できるように、今まで以上にプログラムの構成や指導方法について細やかに、かつ段階的に設定し、その効果を客観的な指標を用いて測定する必要がある。

また、実践においては、細やかな配慮が必要な部分を把握し、丁寧に実践できる実践者を養成するための研修の企画・実施も課題として挙げられる。

さらに、本研究ではよいクラスについて、児童の自由記述を基に分析したが、米田・柳井(2011)はよいクラスの構成概念を大学生の回想データを基に計量テキスト分析の手法を用いてを明らかにしており、同様の手法を用いて、クラスの主体である子どもたちが考えるよいクラスとはどのような要因から成立しているのか、またどのような過程を経て成立するのかについても今後研究を進めたい。

※本論文の個人のケースは、当該児童が特定されないよう若干の修正を加えていることを申し添えます。

<引用文献>

- ・岸田幸弘, 吉岡典彦. 短時間 SIG の継続的な体験によるスクールモラルの実現可能性: 安心・安全な学級の実現を目指して. 2021, 松本大学研究紀要第 19 号, p.1-9.
- ・文部科学省. 新型コロナウイルス感染症の「指定感染症」への指定を受けた 学校保健安全法上の対応について. 2020. 令和 2 年 1 月 28 日事務連絡.
- ・文部科学省. 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル『学校の新しい生活様式』.
https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00029.html (2021 年 9 月 24 日確認)
- ・文部科学省. 新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン. https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00049.html (2021 年 9 月 24 日確認)
- ・齋藤麻依, 米田薫. 心理教育「キラキラプログラム」に関する心理研究: 小学校 3 年生児童を対象とする実践事例. 学校教育相談研究. 2017, 第 27 号, p.35-43.
- ・澤聡一. コロナ禍におけるストレスマネジメント教育の探索的検討: 小学校低学年を対象にした実践を通して. 北海道心理学研究. 2021, 第 43 巻, p.54.
- ・米田薫, 谷口万起子. 心理教育『キラキラプログラム I』に関する研究: 中学校特別支援学級における展開. 大阪成蹊大学紀要. 2019, 第 5 号, p.249-255.
- ・米田薫, 和久田耕平. 心理教育『キラキラプログラム I』の実践と効果に関する研究. 学校教育相談研究. 2019, 第 29 号, p.49-57.
- ・米田薫, 柳井智美. 『よいクラス』とは何か: 大学生の回想データによる構成概念の検討. 大阪成蹊教職研究. 2021, 第 3 号, p.100-109.
- ・米田薫, 谷口万起子. 心理教育『キラキラプログラム I』に関する研究: COVID19 感染症拡大下における中学校特別支援学級での実践. 大阪成蹊大学紀要. 2022, 第 8 号, p.201-209.

<参考文献>

- ・藤田道子. コロナ禍の新しい生活様式に対応できる特別支援学級のための新しい学習方法の開発事例. 教育カウンセリング研究. 2021, 第 11 巻合併号, p.85-90.
- ・国立感染症研究所. 日本国内の新型コロナウイルス感染症第一例を契機に検知された中国武漢市における市中感染の発生. 病原微生物検出情報. 2020, Vol. 41, p.143-144. (2021 年 10 月 24 日確認)
- ・厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について (令和 3 年 10 月 22 日版).
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21810.html
- ・岡部信彦. これまでの出来事の総括. 日本内科学会雑誌. 2020, 第 109 巻 11 号, p.2264-2269.

A Study on the Psycho-Education Program by " Kirakira-Program " Creating classes at elementary schools under the spread of COVID-19 infectious

YONEDA Kaoru *¹

SAITOH Mai *²

WAKUDA Kouhei *³

Abstract

During the period of the spread of the new corona infection, various restrictions were implemented in schools to prevent the spread of the infection. And many educational activities were cancelled or restricted accordingly. The Kira Kira Program, a psychoeducational program for children and students that combined Structurized Group Encounters and Social skills Education with the aim of fostering social and emotional skills, was no exception. This study first examined the practice of the Kira Kira Program, which was devised in response to the restricted circumstances of the time and the method of implementation. Next, we report on two practices that aimed to clarify what they considered to be a good class and to contribute to the future creation of classes under the "new normal".

The results of Practice 1 showed that the strategy of showing typical feelings and reasons for them through sharing, and raising hands where they apply, contributes to ease of participation and reduction of resistance by the children even in normal situations. The results of Practice 2 indicated that the two factors that contribute to what children consider to be a good class are class relationships and the class environment, suggesting the importance of creating a class group.

Keywords

Classroom development with the Corona Disaster, Kira Kira Program, Elementary school

*¹ Osaka Seikei University.Fuculty of Education

*² Daito City Morofuku Elementary School

*³ Katano City Hoshida Elementary School